

## 中国語の非能格動詞に基づく結果構文と自他交替

著者	崔 玉花
雑誌名	言語学論叢 オンライン版
巻	11 (通巻38)
ページ	1-18
発行年	2019-12-05
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00159150">http://hdl.handle.net/2241/00159150</a>

# 中国語の非能格動詞に基づく結果構文と自他交替\*

崔 玉花

## 要 旨

本稿は外項である主語の意味役割の違いによって異なる使役的状况を表す中国語の非能格動詞に基づく他動的結果構文は、それぞれ異なる構造をもつ表面上の自動的結果構文に使役化、脱再帰化が適用されて派生されたと論じる。中国語において非能格動詞に基づく結果構文が内項を付け加える形での脱再帰化、また外項を付け加える形での使役化が可能であるのは、中国語の非能格動詞が結果述語と結びつくと非能格と非対格の両方の特性をもつことと関係していると主張する。また、中国語の非対格動詞に基づく結果構文では使役化による自他交替しか許されないことも指摘する。

## キーワード

結果構文 非能格動詞 自他交替 使役化 脱再帰化

## 1 はじめに

非対格仮説 (Unaccusative Hypothesis)はPermuter (1978)で論じられて以来、様々な観点から議論が重ねられてきた。非対格仮説によれば、自動詞は単一の語類ではなく、非対格動詞と非能格動詞の2種類に区分され、その区分には統語的な側面と意味的な側面がある。意味的には、ごく大雑把に言うと、意図的に動作を行う動作主(Agent)を主語に取る自動詞が非能格、意図を持たず受動的に事象に関わる対象(Theme)を主語にとる自動詞が非対格である。統語的には、自動詞の選択する唯一項が一様に主語として具現されるものの、その基底生成位置に関しては一様に決定されず、非能格動詞の唯一項は外項として主語位置に基底生成されるが、非対格動詞の主語は内項として目的語位置に基底生成されるのである。

この非対格仮説に基づき、これまで様々な言語現象が捉えられてきたことは言うまでもない。本稿で論じる結果構文および使役交替も、非対格仮説と関わる現象であり、英語の使役交替をめぐるのは、内項をもつ非対格動詞<sup>1)</sup>には同形の使役他動詞用法が存在するが、

\* 本稿は中国教育部人文社会科学研究補助金(15YJC740008)および中国国家留学基金の助成を受けた研究成果の一部である。

<sup>1)</sup> 本稿では同形で自他交替する能格動詞における自動詞用法を、L&RH (1995)に従い、外的な起因(externally caused)をもつ非対格動詞と見なし、議論を進める。

外項のみを選択する非能格動詞には同形の使役他動詞用法が存在しないことが指摘されている(Levin and Rappaport Hovav 1995 (以下、L&RHと表記))。

- |  |   |
|--|---|
| (1) a. The ship sank.<br>a'. 船 沉 了。<br>船 沈む ASP <sup>2</sup> | b. Tracy /A gale sank the ship.<br>b'. 水手 们/ 风暴 沉 了 船。<br>水夫 たち/ 暴風 沈める ASP 船   |
| (2) a. John cried.<br>a'. 张三 哭 了。<br>张三 泣く ASP               | b. *This thing/He cried John.<br>b'. *这 件 事/李四 哭 了 张三。<br>この-CL こと/李四 泣く ASP 张三 |

中国語も英語同様、(2)に示すように、非能格動詞“哭(泣く)”には同形の使役の他動詞用法が存在しない。しかし、結果述語を伴い、結果構文の形式をとった場合は使役化可能であり、Huang (2006)では、(3a)と(4a)間に関わる交替を起動使役交替(Inchoative-Causative Alternation)と呼んでいる。英語と違って非能格動詞による使役交替が可能であることに関して先行研究では、中国語の非能格動詞が一定の構文的環境において非対格化されるためであると言う(Sybesma 1999、Huang 2006)。つまり、“哭”などの非能格動詞が結果述語と結びつくと非対格化されるため、外的Causer項を付加し、使役化できると言う。

- |  |  |
|--|--|
| (3) a. 张三 哭 累 了。<br>张三 泣く-疲れる ASP                | b. John cried *(himself) tired.<br>c. *张三がクタクタに泣いた。        |
| (4) a. 这 件 事 哭 累 了 张三。<br>この-CL こと 泣く-疲れる ASP 张三 | b. *This thing cried John tired.<br>c. *このことが张三をくたくたに泣かした。 |

しかし、面白いことに、非能格動詞に基づく結果構文では、新たに導入された外項が無生物であるか意図性をもつ有生名詞句であるかによって、出来事成立への関わり方が異なっており、異なる使役的状况を表す。それに対して、非対格動詞に基づく結果構文ではこのような違いが見られない。

- |                                    |
|------------------------------------|
| (5) a. 李四 哭 醒 了。<br>李四 泣く-目覚める ASP |
|------------------------------------|

<sup>2</sup> 本稿で使うグロスの略語一覧をここに示しておく。  
ASP=Aspect marker, CL=Classifier, GEN=Genitive

李四が泣いて目を覚ました。

- b. 一场 噩梦 哭 醒 了 李四。

1-CL 悪夢 泣く-目覚める ASP 李四

悪夢が原因で李四が泣いて目を覚ました。

- c. 张三 哭 醒 了 李四。

張三 泣く-目覚める ASP 李四

張三が泣いて李四が目覚ました。

- (6) a. 妈妈 累 病 了。

お母さん 疲れる-病む ASP

お母さんが疲れて病気になった。

- b. 艰苦 的 工作 累 病 了 妈妈。

苦しい GEN 仕事 疲れる-病む ASP お母さん

苦しい仕事の原因でお母さんは疲れて病気になった。

- c. 小孩 累 病 了 妈妈。

子供 疲れる-病む Asp お母さん

子供のせいでお母さんは疲れて病気になった。

(5b)は、無生の主語「悪夢」が原因で(5a)の自動詞文の表す出来事が引き起こされたことを表す。一方、主語が有生名詞句である(5c)では、「張三が泣く」という行為によって「李四が目覚ます」という出来事が引き起こされたことを表し、この場合の主語「張三」はV1の項であり、動作主と解釈される。他方、(6)の非対格動詞に基づく結果構文では、無生物主語でも有生物主語でもV1の項にならず、いずれも主語が原因で自動詞文の表す出来事が引き起こされたことを表す。

本稿では、主語の意味役割の違いによって異なる使役的状况を(5b)(5c)のような現象に焦点をあて、非対格動詞に基づく結果構文との比較を通して、これらの結果構文はそれぞれ異なる構造をもつ表面上の自動的結果構文と対応関係があると論じる。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、非能格動詞の使役化をめぐる先行研究の非対格使役分析を概観し、その問題点を指摘する。3節では、英語を中心とした使役起動交替の成立条件に照らして、中国語の非能格動詞に基づく結果構文では原因主語の場合にのみ、使役交替の成立条件を満たすことを、非対格動詞に基づく結果構文との比較を通して明らかにする。4節では、中国語の動作主主語の他動的結果構文は、主語と同一指示のゼロ代名詞を含む他動的結果構文から脱再帰化が適用されて派生されたことを、見せかけの再起目的語の生起に関する事実や丸田(1998)の英語の再帰動詞に対する分析に基づいて示す。そして最後の5節では全体のまとめと残された問題について述べる。

## 2 先行研究

Sybesma(1999)やHuang(2006)は、中国語の表面上目的語を伴わない自動的結果構文に一律に主語を内項とする(7)のような非対格の構造を仮定している。小節(Small Clause)の分析を採用するSybesmaでは、自動的結果構文に主語と結果述語が小節をなし、前項動詞(以下V1と表記)が外項を取らない非対格の構造を仮定している。他方、軽動詞併合(merge)分析を採用するHuangでは、自動的結果構文にV1が様態附加詞(manner adjunct)として軽動詞BECOMEに併合するInchoativeの事象構造を仮定し、中国語は英語と違って非能格動詞もBECOMEと併合し、非対格化できるという。そして使役化現象に関しては、両研究ともに非対格構造をもつ自動的結果構文に軽動詞CAUSEが加えられ、それによって外項が導入される(8)のような構造を仮定している。

- (7) a. [VP V1 [SC NP V2 ]] (Sybesma 1999)  
 b. [BECOME<V1> [ X <V2> ]] (Huang 2006)
- (8) a. [CAUSE<sub>NP</sub> NP CAUSE [VP V1 [SC NP V2 ]]] (Sybesma 1999)  
 b. [X CAUSE [BECOME<V1> [ Y <V2> ]]] (Huang 2006)

他に、石村 (2011)ではV1が行為を表す自動的結果構文が使役化可能となる条件として、当該構文が再帰的な意味構造をもつ(XがV1した結果、XまたはXの一部にV2の状態変化が生じる)必要があることを指摘している。その後の邱(2017)においても、分析の枠組及び主張の違いはあるが、再帰的な構造が必要だという点で石村(2011)と一致しており<sup>3</sup>、また、再帰的な構造をもつ自動的結果構文を非対格の構造と分析する点においても両研究は一致している。

このように、先行研究では分析の仕方および主張の違いはあるものの、V1の性質の違いにかかわらず、表面上の自動的結果構文に非対格の構造を仮定している点では一致している。しかし、冒頭で示したように、動詞“哭(泣く)”は非対格動詞“累(疲れる)”と違って、主語の意味役割の違いによって、異なる使役的状况を表すのである。これは(9a)と(9b)がともに(7)の非対格の構造から派生された文と分析できないことを示している。実際、Huang(2006)では、目的語を伴う他動的結果構文に(10)のような2種類の事象構造を仮定しており、この2種類の事象構造は動詞V1と軽動詞との併合の仕方の違いによって区別されると言う。この事象構造に基づけば、動作主主語の他動的結果構文は、V1が軽動詞CAUSEと併合する(12b)の事象構造に対応されることになるが、Huang(2006)では、こういった動詞がCAUSEと併合可能であるのかについては明言しておらず<sup>4</sup>、また、この事象構造と自

<sup>3</sup> 石村(2011)、邱(2017)では、“手帕哭湿了(ハンカチが泣いて)濡れた)→\*这件事哭湿了手帕(このことで泣いてハンカチが濡れた)”が使役交替できないのは、“手帕哭湿了”が再帰的構造をもたないためであると言う。本稿では“手帕哭湿了”が使役化できないのは、この文が潜在的に外項(動作主)を持っているため、さらに外項(原因項)を付け加える形での使役化ができないと考えている。

<sup>4</sup> Huang (2006: 39(注 24))では、非対格動詞が CAUSE と併合可能であるという立場を取っている。

動的結果構文との関係についても言及していない<sup>5</sup>。

- (9) a. 一场噩梦哭醒了李四。 (=(5b))  
 悪夢が原因で李さんが泣いて目を覚ました。  
 b. 张三哭醒了李四。 (=(5c))  
 張さんが泣いて李さんを起こした。
- (10) Huang(2006)  
 a. Pure causative: [x CAUSE [BECOME<sub><V1></sub> [y <V2>]]] (=(8b))  
 b. Causing with a manner : [x CAUSE<sub><V1></sub>[BECOME[y <V2>]]]

本稿では、中国語の非能格動詞に基づく結果構文は(11)に示すような2種類の交替が可能であると主張する。(11)はHuang(2006)の枠組に基づいて示したものである。(11a)の原因主語の他動的結果構文は先行研究と同じく、非対格の構造をもつ自動的結果構文から使役化が適用されて派生されたと分析する。他方、(11b)の動作主主語の他動的結果構文は主語と同一指示のゼロ代名詞(e)を含む他動的結果構文から脱再帰化が適用されて派生されたと分析する。そして、非対格動詞に基づく結果構文では使役化による自他交替しか許さないと主張する。

- (11) a. 使役化による交替  
 [BECOME<sub><非能格動詞/非対格動詞></sub> [ y <V2>]]  
 →[x<原因主語> CAUSE [BECOME<sub><非能格動詞/非対格動詞></sub> [y <V2>]]]
- b. 脱再帰化による交替  
 [x<sub>i</sub> CAUSE<sub><非能格動詞></sub>[BECOME[e<sub>i</sub> <V2>]]]  
 →[x<動作主主語> CAUSE<sub><非能格動詞></sub>[BECOME[y <V2>]]]

### 3 使役化による自他交替

本節ではまず、先行研究に基づいて英語を中心とした使役起動交替の成立条件について概観する。次に、中国語における動作主主語の他動的結果構文と原因主語の他動的結果構文は、起因事象が指定されているか否かにおいて区別され、原因主語の場合にのみ使役交替の成立条件が満たされると論じる。

#### 3.1 使役交替の成立条件

L&RH (1995)は、内項を取る非対格動詞のうち、外的起因(externally caused)をもつ非対格

<sup>5</sup> Huang(2006:9)では“小宝宝哭醒了(赤ちゃんが泣いて目を覚ました)→小宝宝哭醒了保姆(赤ちゃんが泣いてベビーシッターが目を覚ました)”を「非能格-他動詞交替」と指摘しているが、Huang が提案されている結果構文の事象構造からは外項のみをとる自動的結果構文に該当する事象構造は見当たらない。

動詞は使役交替に参加できるが、外項のみを選択する非能格動詞は使役化できないと言う<sup>6</sup>。そして、使役交替する他動詞は起因事象と結果事象をもつ使役他動詞であり、対応する自動詞は、使役主に当たる項が項構造にリンクされない場合に生じると主張する。L&RHは、自他の派生関係を使役の他動詞から自動詞を導く反他動化(detransitivization)の過程として捉えている<sup>7</sup>。ところが、使役他動詞であっても、対応する自動詞が必ずあるわけではなく、起因事象の性質が完全に未指定の場合、つまり出来事の成立に動作主の特定の行為が含意されない場合に限られると言う (L&RH 1995、小野 2000)。

- (12) a. The vandals broke the window.  
 b. The window broke.
- (13) a. The baker cut the bread.  
 b. \*The bread cut.
- (14) a. The vandals/The rocks/storm broke the window. (L&RH1995: 103)  
 b. John/\*the knife/\*the storm cut the cloth. (Artemis Alexiadou 2015:7)
- (15) a. break: [ [ x DO-SOMETHING] CAUSE [ y BECOME BROKEN ] ]  
 [-specified] (小野2000: 7)  
 b. cut: [ [ x DO-SOMETHING] CAUSE [ y BECOME CUT ] ]  
 [+specified] (小野2000: 7)

動詞cutとbreakはともに状態変化を表す使役他動詞であるが、cutの場合、それに対応する自動詞用法を持たないのは、cutという結果状態を得るためには、それを実現させる過程においてナイフなどの鋭利な刃物の使用に加え、その使用者である動作主の特定の行為が前提となるからである。一方、動詞breakの場合は、窓ガラスに何らかの働きかけを行い、それが壊れた状態にさえなれば、窓ガラスをbreakしたことになり、その手段については特に指定を受けない。使役交替する動詞において起因事象が未指定であることは、外項となる要素に制限がない事実からも裏付けられる。(14)に示したように、動詞breakは、外項として動作主以外に自然力や物理的原因など広汎なものを選択可能であるのに対して、動詞cutは動作主以外の要素を外項として取れない。

ここで(12)(13)に対応する中国語を見てみよう。現代中国語では“沉(沈む/沈める)”“开(開く)”などの少数の単音節動詞を除いては、同一の形態で自他交替を起こすことができない

<sup>6</sup> L&RH(1995:97)は、非対格動詞でも内的な起因(internally caused)をもつ動詞は使役化できないという。しかし、外項として動作主ではなく、原因を表す自然界の出来事が導入される場合、使役他動詞の用法をもつことが指摘されている(谷脇 2000, 影山 2001, Artemis Alexiadou 2015)。

(i) a. The metal corroded  
 b. Sea water corroded the metal./\*My mother corroded the silver utensils by her careless treatment.

<sup>7</sup> 影山 (1996)は、他動詞から自動詞の派生には反使役化(anti-causatization)と脱使役化の2種類の操作があり、英語では反使役化の操作しか許されないが、自他転換の接辞体系をもつ日本語では両方の操作が許されると言う。詳細は影山 (1996)を参照のこと。

ことが指摘されている(望月2003、Lin2004)<sup>8</sup>。(16)に見るように、中国語の動詞“切(切る)”は他動詞用しかなく、対応する自動詞用法を持たない。また、英語の自他両用動詞breakに対応する中国語の“破(割れる)”では、(17)に示すように、自動詞用法しかなく、使役他動詞として用いられるには、“破”の前に抽象的意味を表す“打、弄”といった軽動詞を付け加える必要がある。“打、弄”のような軽動詞は「何らかの力が加わった」という抽象的意味を表すだけで、具体的にどういった手段(起因事象)でその結果を引き起こしたのかは明確でない。つまり、中国語の“打破/弄破”も英語のbreakと同様、起因事象が未指定であると考えられる。

(16) a. 张三 切 了 面包。

张三 切る ASP パン

张三がパンを切った。

b. \*面包 切 了。<sup>9</sup>

パン 切れる ASP

\*パンが切れた。

(17) a. 玻璃 窗 破 了。

ガラス 窓 割れる ASP

ガラス窓が割れた。

b. 张三/暴风雨{\*破 /打破 /弄破} 了 玻璃 窗。

张三/暴風雨 破れる/打つ-破れる/する-破れる ASP ガラス 窓

张三/暴風雨がガラス窓を割った。

このように、英語では使役起動交替が成立するには、使役他動詞における起因事象の性質が完全に未指定でなければならない。

### 3.2 原因主語と使役化

Sybesma (1999)では、元来は非能格である“哭”などの動詞が結果述語と結びつくと非対格化されることを示す証拠として、「不定主語の動詞後置可能性」を挙げている。中国語では(18)に示すように、同じく自動詞であっても“醉(酔う)”のような非対格動詞の主語は動詞に後置し、目的語の位置に現れることができるが、“哭(泣く)”のような非能格動詞の主語は動詞に後置できない(Huang 1987a、徐2001)。しかし、非能格動詞が結果述語と結びつくと、(19a)に示すように、表面上の主語は目的語の位置に現れることができ、非対格の特性を示す。

<sup>8</sup> 中国語に同形態で使役交替を起こす動詞が少ないのは、中国語に単音節達成動詞(使役他動詞)が存在しないことと関係していると考えられる。中国語の達成動詞に関する議論は Tai(1984)を参照のこと。

<sup>9</sup> “面包 pro 切了”のように、目的語の主語化された主語文として解釈される場合は適格文となる。



- (18) a. \*哭 / 咳嗽 / 笑 了 不少人。  
泣く/咳をする/笑う ASP 多い 人  
多くの人が泣いた/咳をした/笑った。
- b. 醉 / 死 了 不少人。  
酔う/死ぬ ASP 多い 人  
多くの人が酔った/死んだ。
- (19) a. 哭 累 了 不少人。 (Sybesma 1999: 43)  
泣く-疲れる ASP 多い 人  
多くの人が泣きつかれた。
- b. (那个晚会上) 醉 倒 了 好几个人。 (Sybesma 1999: 43)  
酔う-倒れる ASP 何人か 人  
(あのパーティーで)何人かの人が酔って倒れた。

本稿もSybesmaと同様、中国語の非能格動詞が結果述語と結びつくと非対格の特性をもつため、外項を付け加える形での使役化が可能であると考えている。しかし、本稿では使役化による自他交替と認めるには、新しく導入された外項が原因主語の場合に限られると主張する。これは起因事象が指定されているか否かにおいて、原因主語の場合と動作主主語の場合とで異なる振る舞いを見せるからである。つまり、原因主語の場合は、(20b)(21b)に示すように、主語が原因で自動詞文の表す出来事が引き起こされたことを表し、この場合、起因事象は指定されていない。それに対して、動作主主語の場合は、(20c)(21c)に示すように、動作主の特定の行為、つまり、V1の表す「笑う/泣く」という行為によって目的語に状態変化が引き起こされたことを表し、この場合、起因事象は指定されている。

- (20) a. 李四 笑 醒 了。  
李四 笑う-目覚める ASP  
李四が笑って目を覚ました。
- b. 一场 好 梦 笑 醒 了 李四。  
1-CL 良い 夢 笑う-目覚める ASP 李四  
いい夢が原因で李四が笑って目を覚ました。
- c. 张三 笑 醒 了 李四。  
张三 笑う-目覚める ASP 李四  
张三が笑って李四が目を覚ました。
- (21) a. 妈妈 哭 累 了。  
お母さん 泣く-疲れる ASP  
お母さんが泣いて疲れた。

b. 这件事 哭 累 了 妈妈。

この-CL こと 泣く-疲れる ASP お母さん

このことが原因でお母さんが泣いて目を覚ました。

c. 小孩 哭 累 了 妈妈。

子供 泣く-疲れる ASP お母さん

子供が泣いてお母さんが疲れた。

通常の使役交替においては、自動詞の主語と他動詞の目的語の間に文法関係の対応が見られるほか、意味の面でも自動詞文と他動詞文との間に対応関係が見られる。例えば、動詞breakの場合、(22a)の他動詞文は(22b)の自動詞文が記述するような状況を誰かが不特定的手段で引き起こしたことを表し、他動詞文は「窓が壊れる」という自動詞文の表す意味を含意している。しかし、動作主主語の他動的結果構文では、(20c)(21c)で示したように、起因事象が特定され、V1が起因事象の構成成分の一部となっているため、他動詞文と自動詞文では意味的にずれが生じる。例えば、自動詞文の(20a)では「笑う」のも「目を覚ます」のも主語の「李四」であるが、(20c)では「笑う」のは「張三」で、「目を覚ます」のは「李四」というように、完全に対応していない。それに対して、原因主語の(20b)(21b)では、V1が起因事象の構成成分でないため、他動詞文は自動詞文の表す意味を含意し、意味的対応関係が見られる。

(22) a. John broke the window.

b. The window broke.

このように、中国語の非能格動詞に基づく結果構文では原因主語の場合にのみ起因事象が未指定であり、使役交替の成立条件を満たしていることが分かる。

一方、非対格動詞に基づく結果構文では、(23)に示すように、主語の有生性にかかわらず、起因事象が未指定であり、自動詞文と他動詞文との間に意味的対応関係が見られる。例えば有生主語の(23c)では、「李四のせいで張三が酔って倒れた」という意味を表しており、この場合、“李四”がどういった手段で“張三”を酔わせて倒れた状態にしたかは不明である。

(23) a. 张三 醉 倒 了。

張三 酔う-倒れる ASP

張三が酔って倒れた。

b. 那 杯 酒 醉 倒 了 张三。

あの CL 酒 酔う-倒れる ASP 張三

あのお酒が原因で張三が酔って倒れた。

c. 李四 醉 倒 了 张三。

李四 酔う-倒れる ASP 张三

李四のせいで张三が酔って倒れた。

同様のことは、英語の非対格動詞に基づく結果構文にも観察される。(24)(25)は能格動詞 freeze に基づく自動的結果構文と他動的結果構文間の使役交替を示したものであるが、この場合、外項となる要素は自然力でも有生主語であっても起因事象は特定されていないのである。つまり、(25b)では主語の John がどういった手段で水を凍らせたかは未指定である。

(24) a. The river froze solid.

b. The change in weather the last few weeks froze the river solid. (Huang 2006: 10)

(25) a. The water froze solid.

b. John froze the water solid.

このように、非対格動詞に基づく結果構文では、主語の有生性にかかわらず、起因事象が未指定であり、使役交替の成立条件を満たしていることが分かる。一方、中国語の非能格動詞に基づく結果構文では、動作主主語の場合は起因事象が特定されているが、原因主語の場合は起因事象が未指定であり、使役交替の成立条件を満たしているのである。

#### 4 脱再帰化による交替

自動詞と他動詞の対応には、動詞 break のような自動詞の主語と他動詞の目的語の間に文法関係の対応が見られる交替の他に、eat、write のような目的語の省略が可能な動詞に見られる自他の対応(e.g., She eats everything → She eats like a horse)もある。Cheng&Huang (1994) は、(26a)と(26b)間の交替を eat など目的語省略が可能である動詞の間に見られる交替と平行的な現象と見なし、「非能格-他動詞交替(unergative-transitive alternation)」と呼んでいる。Cheng&Huang では、V1 のアスペクト性が結果構文のアスペクト特性および項構造を決定するとし、V1 が行為動詞である非能格動詞に基づく結果構文には、外項として動作主を義務的に選択する非能格動詞あるいは他動詞の項構造が対応されると言う<sup>10</sup>。

(26) a. 张三 哭 醒 了 。

张三 泣く-目覚める ASP

张三が泣いて目を覚ました。

<sup>10</sup> Cheng&Huang (1994)は、V1 が状態或いは状態変化を表す Non-active RVC(Resultative Verb Compounds)には内項を義務的要素とする能格動詞あるいは使役動詞の項構造が対応されるという。そして非能格動詞に基づく結果構文に見られる使役交替現象に関しては、自動詞文の表す出来事に外的 Causer が存在することが文脈的に保証され、V1 の意味上の主語が動作主ではなく Causee と解釈される場合、通常は非能格型である RVC が能格型 RVC として使用することができるという。

b. 张三 哭 醒 了 李四。

张三 泣く-目覚める ASP 李四

张三が泣いて李四が目を覚ました。

本稿もCheng&Huang (1994)と同様、(26b)の動作主主語の他動的結果構文は外項をもつ表面上の自動的結果構文と対応関係をもつと考えている。しかし、(26ab)間の交替を単に内項が付け加えられた他動化による交替と見るCheng&Huangと異なり、本稿では(26b)はゼロ代名詞(e)を含む他動的再帰構文に対して、脱再帰化が適用されて派生したものと見なす。

以下ではまず、英語の結果構文との比較を通して、(26a)のような表面上の自動的結果構文は、主語と同一指示であるゼロ代名詞(e)を含む他動的結果構文であることを、見せかけの再起目的語の生起に関する事実や中国語がゼロ代名詞を許容する言語であることに基づいて示す。次に、丸田 (1998)の再帰動詞の自他交替分析に基づいて、(26ab)間の交替を分析する。

#### 4.1 見せかけの再帰目的語(fake reflexive object)の生起

英語と中国語では、(27ab)に示すように、本来目的語を取らないはずの非能格動詞が結果述語を伴う場合、動詞によって厳密下位範疇化されない見せかけの目的語を伴い、見かけ上は他動詞的に振舞うことができる。それに対して非対格動詞の場合は、(28ab)に示すように、見せかけの目的語を伴う結果構文が成立しない。

(27) a. She cried the handkerchief wet.

b. 她 哭 湿 了 手帕。

彼女 泣く-濡れる ASP ハンカチ

\*彼女がハンカチをビショビショに泣いた。<sup>11</sup>

(28) a. \*The lake froze the fish to death. (影山 2001: 170)

b. \*湖水 冻 死 了 鱼。<sup>12</sup>

湖 凍る-死ぬ ASP 魚

湖が凍り付いて魚が死んだ。

(29) Burzio の一般化：外項を取る動詞のみが目的語に対格を付与することができる。

<sup>11</sup> 日本語では結果構文を構成する動詞に意味的制限があり、結果述語が動詞の含意する変化の方向性と一致した結果状態を表す「本来的結果構文/弱結果構文」しか許されない(影山 1996, 2001, Washio1997)。

<sup>12</sup> 以下の結果構文は一見内項と解釈される見せかけの目的語の生起が許されるように見えるが、実はこの場合、主語“张三(张三)”は原因主語“严寒(酷寒)”と同様、外項であるため、目的語を伴うことができると考えられる。本稿の分析からすると、(iab)は“李四/不少人冻死了”という非対格の自動的結果構文に使役化が適用されて派生された文である。

(i) a. 张三冻死了李四。

张三のせいで李四が凍えて死んだ。

b. 严寒冻死了不少人。

酷寒が原因で多くの人が凍えて死んだ。

見せかけの目的語の生起において非能格動詞と非対格動詞の間に見られる対立について L&RH (1995)は、(29)の Burzio (1986)の一般化に基づいて捉えている。この一般化に基づけば、非能格動詞 cry や run は、外項をもつため、目的語に対格を付与することができ、他動詞的に振舞うことができる。一方、(28)における非対格動詞 freeze では、主語 the lake が内項と解釈されるため、さらに内項を付け加える形での他動詞化はできないのである。

同様の文法性の対立は、主語と同一指示の再帰代名詞が見せかけの目的語として生起する場合にも観察される。(30)に示すように、非能格動詞cryに基づく結果構文では再帰代名詞の生起が可能であるのに対して、非対格動詞freezeの場合は不可能である。中国語も英語同様、(31)に示すように、非能格動詞“哭(泣く)”と非対格動詞“冻(凍える)”では再帰代名詞の生起において異なる振る舞いを見せる。

- (30) a. She cried herself awake. (Huang2006: 29)  
 b. \*The river froze itself solid. /The river froze solid. (L&RH 1995:39)
- (31) a. 张三 哭 醒 了 自己。  
 张三 泣く-目覚める ASP 自分  
 张三が泣いて自分が目を覚ました。
- b. \*小狗 冻 死 了 自己。/ok 小狗 冻 死了。  
 子犬 凍える-死ぬ Asp 自分 子犬 凍える-死ぬ Asp  
 子犬が凍えて自分が死んだ/子犬が凍えて死んだ。
- c. ??\*张三 冻 醒 了 自己。/ok 张三 冻 醒了。  
 张三 凍える-目覚める Asp 自分 张三 凍える-死ぬ Asp  
 张三が凍えて自分が目を覚ました。/张三が凍えて目を覚ました。

再帰代名詞“自己”を補うと、再帰代名詞に強勢が置かれ、「他の人ではなく自分である」という強調または対比の読みが生じることはあるが、ここで注目すべきは、中国語の非能格動詞に基づく結果構文では非対格動詞の場合と違って、見せかけの目的語の生起が可能である事実である<sup>13</sup>。これは中国語の非能格動詞が結果述語と結びつく場合も非能格動詞としての特性をもっており、また(31a)における主語は外項であることを示している。ところが、ここで注意すべきことは、英語では非能格動詞に基づく結果構文において再帰代名詞の生起が義務的となるのに対して、中国語では随意的であるという点である。

- (32) a. I coughed \*(myself) awake. (大矢 2001:166)  
 b. 小王 咳 醒 了 (自己)。

<sup>13</sup> 宋 (2007) は、(34b)を「BA 構文」にした“他把自己哭病了”では対比の読みがないという。Lin(2004)では、再帰代名詞が生起する場合は、「主語の過度の能力、過度の受影性の意味」を伝達しているという。

王さん 咳をする-目覚める ASP 自分

王さんが咳をして(自分が)目を覚ました。

(33) a. He laughed \*(himself) silly. (大矢 2001:166)

b. 他 笑 傻 了 (自己)。

彼 笑う- 愚かである ASP 自分

彼が笑って(自分が)愚かになった。

(34) a. 李四 跑 累 了 (自己)。 (Lin 2004: 103)

李四 走る-疲れる ASP 自分

張三が走って(自分が)疲れた。

b. 他 哭 病 了 (自己)。 (宋 2007 : 149)

彼 泣く-病む ASP 自分

彼が泣いて病気になった。

英語の結果構文の成立を巡っては、結果述語の叙述対象が基底構造の直接目的語に限られるという「直接目的語制約(Direct Object Restriction: Simpson 1983, L&RH 1995,etc.)<sup>14</sup>」がよく知られている。この制約によれば、英語では主語指向の非能格動詞に基づく結果構文は直接目的語制約により排除されるが、目的語の位置に再帰代名詞を補うと、結果述語の叙述対象が見せかけの目的語であるため、適格文となる。一方、非対格動詞に基づく結果構文では、非対格仮説におり、表面上の主語が目的語位置に基底生成された派生主語と見なされているため、再帰目的語を伴わない結果構文(*e.g.*, *The river froze solid*)が成立する。

本稿では、再帰代名詞の生起において、中国語と英語間に見られる違いは、ゼロ代名詞を許容するか否かという違いに還元できると提案する<sup>15</sup>。つまり、中国語は英語と違って、ゼロ代名詞を許容する言語のため、再帰代名詞の生起が随意的になるのである。そうすると、再帰代名詞が音声的実体を持たない“张三哭醒了e”では、結果述語と叙述関係を結ぶのは主語ではなく目的語の位置にあるゼロ代名詞と分析でき、したがって、英語の結果構文の場合と同様、この文の妥当性が直接目的語制約によって説明できるのである。

## 4.2 脱再帰化による交替

自分の行為が自分に返ってくることを表す英語の *shave*、*wash* などの再帰動詞(*reflexive verb*)には、再帰代名詞が現れた他動詞用法と再帰代名詞が脱落した自動詞用法がある。ま

<sup>14</sup> 統語論では直接目的語制約が相互 c-統御或いは相互 m-統御という構造的条件下で捉えられている (Carrier & Randall 1992, Takezawa 1993, 竹沢 2000)。最近では直接目的語制約の妥当性を否定する研究もあり、その反例と指摘されているのは、主に主語の位置変化を表す移動構文である。移動構文を結果構文として見るかどうかは議論の分かれるところであり、移動構文を結果構文と区別する立場(加賀 2007)に立てば、移動構文にはそもそも直接目的語制約が適用されないことになる。本稿は直接目的語制約が状態変化を表す結果述語の叙述対象の問題を捉える一般化としては妥当であるという前提で議論を進める。

<sup>15</sup> 中国語がゼロ代名詞を許容する言語であることについては Huang(1984,1987)、Xu(1986)を参照のこと

た、他動詞用法の場合、再帰代名詞以外に(35c)(36c)に示すように、他の名詞句も目的語として生起可能である。丸田 (1998)は、以下の(35a)と(35c)および(36a)と(36c)間に見られる交替を、脱再帰化による自他交替と分析している。

- (35) a. John shaved  
       b. John shaved himself.  
       c. The barber shaved the customer.
- (36) a. I washed.  
       b. I washed myself.<sup>16</sup>  
       c. I washed my dog.

丸田(1998)では、shaveのような再帰動詞が再帰目的語の生起を許す事実に基づいて、これらの動詞は表面的に自動詞であっても、意味的にはAgentとPatientをとる2項動詞と分析し、AgentとPatientが語彙意味レベルで同一の場合には、Patient(再帰代名詞)はAgent項により束縛されるので、その統語的実現が抑圧され、見かけ上は単項の自動詞文が実現されるという。そして再起動詞は、特別の事情がない限り、自己を対象にできれば、他者も対象にできるという特徴を持っており、再帰的出来事を非再帰的に捉えることが可能であるという。例えばshaveについて、自分の髭を剃れば、当然他の人の髭も剃れるわけである。このように再帰的出来事が非再帰的に捉えられれば、論理的目的語は独立項として実現され、(35c)(36c)のような他動詞文が導かれるのである。この語彙過程を、丸田は脱再帰化と呼び、使役化による自他交替とは基本的に性質が異なるものと見なしている。

このように英語の再帰動詞に見られる交替は、外項をもつ再帰的自動詞文と他者を内項とする他動詞文との交替で、この場合、両文の主語は共通している。実は、中国語の非能格動詞に基づく結果構文が示す次の交替も、こういった特徴をもつのである。

- (37) a. 张三哭醒了(自己)。       (=31a)  
       张三が泣いて(自分が)目を覚ました。
- b. 张三哭醒了李四。       (=5c)  
       张三が泣いて李四が目を覚ました。
- (38) a. 小孩哭累了(自己)。  
       子供が泣いて(自分が)疲れた。
- b. 小孩哭累了妈妈。  
       子供が泣いてお母さんが疲れた。

<sup>16</sup> 竹沢(1991)では、日本語の再帰代名詞「自分」は「洗う」のような影響動詞の目的語の位置には現れないことを指摘している(「自分を責めた/\*自分を洗った」)。中国語も人の身体やその部分を再帰代名詞で表現することができず(“??洗了自己/\*刮了自己”)、“洗了(自己的)身子”に表現しなければならない。

(39) a. 张三咳醒了(自己)。

張三が咳をして(自分が)目を覚ました。

b. 张三咳醒了李四。

張三が咳をして李四が目を覚ました。

(37a)-(39a)では「xがV1することによって、x(自分)をある結果状態にする」という再帰的な出来事を表しており、それらに対応する(37b)-(39b)の他動的結果構文では「xがV1することによってyをある結果状態にする」という非再帰的な出来事を表している。この場合、両文における目的語は「自己」から「他者」に変わっているが、主語は共通している。ここから(37b)-(39b)は、英語の再帰動詞の場合と同様、(37a)-(39a)に脱再帰化が適用されて派生した文と分析できると考えられる。ところがここで注意すべきは、非能格動詞に基づく(37a)-(39a)のような文を、本稿では主語と同一指示のゼロ代名詞を含む他動的結果構文と分析している。そうすると、(37a)-(39a)と(37b)-(39b)に関わる交替は脱再帰化による自動詞文と他動詞文との交替でなく、再帰的他動的結果構文と非再帰的他動的結果構文との交替と分析すべきであろう。

## 5. 終わりに

本稿では、中国語の非能格動詞に基づく原因主語の他動的結果構文と動作主主語の他動的結果構文は、それぞれ異なる構造をもつ表面上の自動的結果構文に使役化、脱再帰化が適用されて派生されたと論じた。この2種類の交替は性質が異なるもので、前者は非対格の自動的結果構文に外項が付け加えられた使役化による交替で、後者は外項と内項(ゼロ代名詞)をもつ再帰的な他動的結果構文に内項が他者に置き換えられた脱再帰化による交替である。本稿ではこのような2種類の交替が可能であるのは、中国語の非能格動詞が結果述語と結びつくとき非能格と非対格の両方の特性をもつことと関係していると主張した。そして、非対格動詞は結果述語と結びつく場合も非対格の特性しかもたないため、使役化による自他交替しか許されないことを、具体的なデータに基づいて示した。

最後に本稿の主張と関連して残された問題について触れておきたい。本稿では V1 が非能格動詞の場合を中心に考察したが、V1 が他動詞の場合の自動的結果構文においても、本稿で示した2種類の交替が可能であるか、考察する必要があると考えられる。また、本稿では中国語の非能格動詞に基づく結果構文が示す2種類の交替は、中国語の非能格動詞が結果述語と結びつくとき非能格と非対格の両方の特性をもつことと関係していると主張した。そうすると、なぜ英語や日本語の非能格動詞では同じ構文的環境において非対格動詞の特性を示さないのか、という問題が生じてくる。この問題について Huang(2006)では「語彙化パラメータ(Lexicalization Parameter)」に基づいて捉えているが、このパラメータでは説明できない現象もある。Huang の「語彙化パラメータ」によれば、分析的言語(analytic language)である中国語では、動詞の項構造が Lexicon であらかじめ指定されているのでは



なく、統語部門でこういった軽動詞(BECOME、CAUSE、USE)と併合するかによって決まるため、非能格動詞は BECOME と併合し、非対格化できるのである。一方、総合的言語(synthetic language)である英語では、Lexicon で動詞の項構造が決まるため、既に[+AGENT]の素性をもつ非能格動詞は統語レベルで軽動詞 BECOME と併合できず、非対格の特性を持たないのである。しかし、本稿で示したデータ(e.g.,“小孩累病了妈妈”)からすると、非対格動詞は自由に軽動詞と併合するわけではなく、CAUSE とは併合不可能である。また、英語では本来非能格動詞である運動様態動作主動詞(agentive verbs of manner of motion) が結果的な位置を表す方向句と共起する(e.g.,She danced (\*herself) free of her captors)と、非対格化されることが指摘されている(L&RH 1995)。これは動詞の項構造が英語では Lexicon で決まるという Huang の説明にとっては一見問題になる現象となるだろう。さらに、このパラメータでは動作主主語の他動的結果構文からさらに下位分類されると思われる「強結果構文」の成立をめぐる日本語と中英語との対立(??彼は金属をペチャンコに叩いた/He hammered the metal flat/他锤平了金属)についてもうまく捉えない。言語間の対立をどういったパラメータで体系的に捉えるか、この問題についても今後の課題にする。

#### 参考文献

- 石村広 (2011)『中国語結果構文の研究-動詞連続構造の観点から-』白帝社。
- 大矢俊明 (2001)「身体への行為と結果構文-英語とドイツ語を比較して-」筑波大学現代言語学研究会 (編)『事象と言語形式』145-176.
- 小野尚之 (2000)「動詞クラスモデルと自他対応」丸田忠雄・須賀一好 (編)『日英語の自他の交替』ひつじ書房。
- 加賀信広 (2007)「結果構文と類型論パラメータ」『結果構文研究の新視点』177-215, ひつじ書房。
- 影山太郎 (1996)『動詞意味論-言語と認知の接点-』くろしお出版。
- 影山太郎 (2001)『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店。
- 崔玉花 (2008)「中国語結果構文と非対格性-英語・日本語結果構文との比較を通じて-」『筑波応用言語学研究』15: 45-58.
- 崔玉花 (2012)「也谈汉语中的空宾语」『北京化工大学学报(社会科学版)』1: 57-60.
- 竹沢幸一 (1991)「受動文、能格文、分離不可能所有構文と「ている」の解釈」『日本語のヴォイスと他動性』59-81,くろしお出版。
- 竹沢幸一 (2000)「空間表現の統語論-項と述部の対立に基づくアプローチ-」青木三朗・竹沢幸一 (編)『空間表現と文法』163-214, くろしお出版。
- 谷脇康子 (2000)「非対格自動詞の自他交替」『英米文学』44(1): 105-118 関西学院大学英米文学会。
- 丸田忠雄 (1998)『使役動詞のアナトミー 語彙的使役動詞の語彙概念構造』松柏社。
- 望月圭子 (2003)「日本語と中国語における使役起動詞交替」国松昭『松田徳一郎教授追悼論文集』

236-260, 研究社出版.

邱林燕 (2017) 「中国語結果構文の統語論的研究」北海道大学博士学位論文.

宋文輝 (2007) 『现代汉语动结式的认知研究』北京大学出版社.

徐杰 (2001) 『普遍语法原则与汉语语法现象』北京大学出版社.

Artemis, Alexiadou (2015) The causative alternation revisited constraints and variation. *English Linguistics* 32: 1-21. English Linguistic Society of Japan.

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government and Binding Approach*. Reidel.

Carrier Jill and Janet Randall (1992) the Argument Structure and Syntactic Structure of Resultatives. *Linguistic Inquiry* 23: 173-234.

Cheng, Lisa Lai-Shen and Huang, C.-T.James (1994) On the Argument Structure of Resultative Compounds. In: Matthew Chen and Ovid Tzeng (eds.), *In Honor of William S.Y.Wang: Interdisciplinary Studies on Language and Language Change*, 187-221. Taipei: Pyramid Press.

Huang, C. T. J. (1984) On the Distribution and Reference of Empty Pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-574.

Huang, C.T.J. (1987a) Existential sentences in Chinese and (in)definiteness. In: Eric J. Reuland and Alice G. B. Meulen (eds.) *The representation of (in)definiteness*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

Huang, C. T. J. (1987b) Remarks on Empty Categories in Chinese. *Linguistic Inquiry* 18: 321-337.

Huang, C. T. J. (2006) Resultatives and Unaccusatives: a Parametric View. 『中国語学』 253: 1-43.

Lin, Jimmy (2004) *Event Structure and the Encoding of Arguments: The syntax of the Mandarin and English verb Phrase*. Doctoral dissertation, MIT.

Levin Beth and Malka Rappaport Hovav(1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.

Perlmutter, David M. (1978) Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. *BLS* 4: 158-189.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin (2001) An Event Structure Account of English Resultatives. *Language* 77: 766-797.

Simpson, Jane (1983) Resultatives. In: Lori Levin et. Al. (eds.), *Papers in Lexical-Funtional Grammar*, 143-157. Indiana University Linguistics Club.

Sybesma, Rint (1999) *The Mandarin VP*. Kluwer Academic Publishers.

Tai, James (1984) Verbs and times in Chinese: Vendler's four categories. *CLS* 20(2): 286-296.

Takezawa, Koichi (1993) Secondary Predication and the Goal/Locative Phrases. In: Nobuko Hasegawa(eds.), *Japanese Syntax in Comparative Grammar*, 45-77. Kurosio.

Washio, Ryuichi (1997) Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6: 1-49.

Xu, Liejiong (1986) Free Empty Category. *Linguistic Inquiry* 17: 75-93.

(崔 玉花 延边大学)

# Unergative Resultatives in Chinese and Transitivity Alternation

CUI Yuhua

This paper argues that Chinese unergative resultatives which representing different causative situations depending on the different external arguments are derived from the different surface intransitive structures. It is possible that Chinese unergative resultatives can dereflexivize by adding an internal argument, and also causativize by adding an external argument. We argue these facts are reduced to the possibility in Chinese for an unergative verb which combined with resultative predicate have both properties, unergativity and unaccusativity. We also point out that unaccusative resultatives in Chinese only allow inchoative-causative alternation.